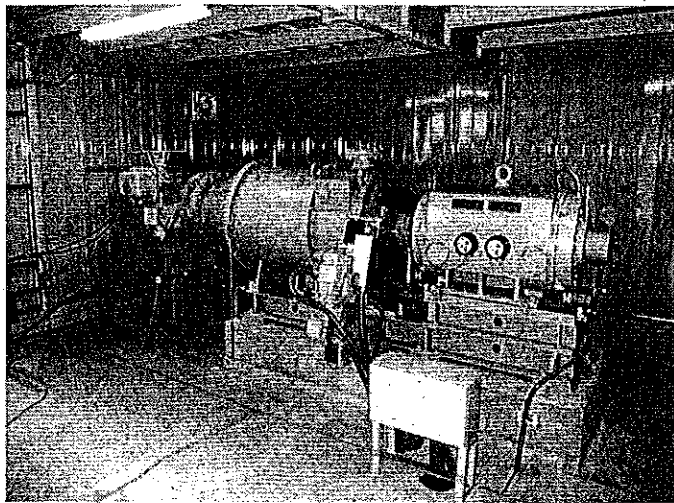


東 電

砥川小水力が運開

日光 揚水の自然放流水活用

東京電力は26日、栃木県日光市に建設を進めていた砥川（とがわ）発電所（240キロワット）が営業運転を開始したと発表した。揚水発電所の自然放流水を活用したダム式発電所としては11年ぶり、2地点目。年間の発電電力量は一般家庭約300世帯分に相当する約100万キロワット時、二酸化炭素（CO₂）排出削減量は約350トンを見込む。東電は電源の低炭素化を積極的に進めており、水力については新規開発やリプレースが相次いでいる。



砥川発電所は、揚水式取り組みとして2020年の今市発電所の下部調整池（今市ダム）に流れ込む利根川水系砥川の水源を活用する。有効落差は最大約51メートル、最大使用水量は毎秒0・6立方メートル。昨年9月に着工していた。

東電は「中長期成長宣言2020ビジョン」において、グループ全体の日光市で営業運転を開始した砥川発電所の水車発電機。300世帯分に相当する年間100万キロワット時を見込む

1千キロワット）が運開したほか、1907年に運開した駒橋発電所（山梨県大月市）1、2号機水車発電機を大容量機1台に集約するリプレースを終え、発電所全体の出力を1千キロワット向上させた。さらに、農業用水路を活用した水力として79年ぶりの大町新堰（おおまちしんせき）発電所（長野県大町市、1千キロワット）に着工。12年6月の運開を予定する。水力発電は開発地点が制約されるものの、再生可能エネルギーの中では安定的な供給力として期待できることから、引き続き最大限に活用を図っていく考えだ。